



小見山 道

(日本大学松戸歯学部口腔健康科学講座
顎口腔機能治療学分野)

『顎関節症診察、診断、基本治療の考え方』

<要旨>

日本顎関節学会では、顎関節症の病態分類を Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders (DC/TMD)との整合性を配慮して行いました。そして「顎関節症の概念 2013」、「顎関節症の病態分類 2013」、「顎関節・咀嚼筋の疾患あるいは障害 2014」、「顎関節症と鑑別を要する疾患あるいは障害 2014」を公表しています。さらに「顎関節症の診断基準 (2019)」を発表し、それに沿った顎関節症の治療指針 2020 を公表しました。今回はこの診断基準に沿って、病態(咀嚼筋痛障害、関節痛障害、復位性関節円板障害、非復位性関節円板障害、変形性顎関節症)と診察、開口域等の計測、顎関節雑音の触知、咀嚼筋・顎関節の触診などの検査から診断について解説し、さらに顎関節症治療の指針 2020 に沿って、各病態の基本治療について概説いたします。

まずは、本講演が顎関節症について診察、検査、診断から基本治療を再確認する機会になればと思います。さらに今回の学術講演会では本講演に引き続き、基本治療で対応が困難な場合の治療について、外科的治療を中心に講演いただきます。本講演の内容を踏まえて、本日の以降の講演を聴講ください。

<講演内容>

- I 顎関節症の病態分類
- II 顎関節症の診断基準
- III 各病態の病歴と診察

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節症の病態を説明できる
- ・医療面接を実施できる
- ・口腔外の診察を実施できる
- ・顎関節症の診断および病態診断ができる

<略歴>

1989 年 日本大学松戸歯学部卒業
1990 年 日本大学松戸歯学部 総義歯補綴学講座
1998 年 日本大学 博士(歯学)
2001 年 日本大学助手(松戸歯学部・総合歯科診療学)
2002 年 日本大学講師(松戸歯学部・総合歯科診療学)
2003 年~2005 年 ベルギー王国ルーベンカトリック大学歯学部 客員教授
2011 年~日本大学准教授(松戸歯学部・顎口腔機能治療学)
2016 年~日本大学教授(松戸歯学部・顎口腔機能治療学, 2021 年~クラウンブリッジ補綴学)
日本大学松戸歯学部附属病院 顎関節咬合科科长

代表的所属学会:

日本顎関節学会(常任理事 指導医)
日本口腔顔面痛学会(常任理事 指導医)
日本補綴歯科学会(常務理事 指導医)、日本疼痛学会(代議員)
日本顎口腔機能学会(常任理事)、日本歯科心身医学会(評議員)
International Association of Dental Research (Past President for Neuroscience Group)
Asian Academy of Craniomandibular Disorders (Council member)
International Association for the Study of Pain



島田 淳

(医療法人社団 グリーンデンタルクリニック)

『基本治療が奏功しなかった症例を考える』

<要旨>

顎関節症は、適切な基本治療を行うことで、そのほとんどが症状の軽減、消失をみるとされています。しかし、適切と思われる保存療法を行っても症状が改善しないケースもあります。その主な理由としては、疾患自体の問題、歯科医師側および患者側の問題などが考えられますが、開業医として最も困るのは、痛みが取れない。あるいは開口障害が改善しないという事ではないでしょうか。特に痛みは、患者の主観的な問題なので評価に困ります。運動療法により、機能改善後に痛みの軽減があると思っけていても、患者が運動療法により痛みを訴え続けた時、その先にある痛み改善の目安を示唆する事は難しいと思います。開口障害も同様で、毎回、変わらないと訴えられたら為す術はありません。このようなケースでは、やはり高次医療機関へ助けを求めることも必要だと思います。今回の講演では、自院で対応に困った顎関節症、さらには口腔外科へ紹介した症例を見直すことで、開業医と口腔外科との連携について考えてみたいと思います。

<講演内容>

- I 開業医における顎関節症の鑑別診断のポイント
- II 開業医における顎関節症の病態診断のポイント
- III 顎関節症の基本療法の実際
- IV 顎関節症の予後管理と高次医療機関への紹介

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節症以外の顎関節疾患と鑑別できる
- ・顎関節症の診断および病態診断ができる
- ・各病態に対し治療・管理目標を設定できる

<略歴>

- 1987年 日本大学歯学部卒業
- 1991年 日本大学大学院歯学研究科(補綴学専攻)修了
- 1991年 日本大学歯学部助手(補綴学教室局部床義歯学講座)
- 1995年 日本大学助手(補綴学教室局部床義歯学講座)
- 1999年 東京歯科大学講師(スポーツ歯科研究室)
- 2005年~医療法人社団グリーンデンタルクリニック 理事長
東京歯科大学非常勤講師(スポーツ歯科研究室)
- 2008年 神奈川歯科大学非常勤講師(かみあわせリエゾン診療科)
- 2012年~日本顎関節学会理事
- 2017年 神奈川歯科大学臨床教授(包括的咬合機能回復外来)
- 2020年~神奈川歯科大学特任教授(包括的咬合機能回復外来)

- 日本顎関節学会(理事、専門医、指導医)
- 口腔顔面痛学会(評議員、専門医、指導医)
- 日本補綴歯科学会(専門医、指導医)
- 日本歯科心身医学会(代議員)



岡本 俊宏

(東京女子医科大学 歯科口腔外科)

『顎関節症として歯科口腔外科に紹介された症例について』

<要旨>

日本顎関節学会「顎関節症治療の指針 2020」による顎関節症の専門治療として、顎関節症では、基本治療により 1 か月から 3 か月の治療でも改善しない場合、MRI による検査や、より高度な医療連携による処方、また医療連携による専門的対処が必要となることが多いとされています。顎関節症症状に類似した顎関節症以外の顎関節・咀嚼筋の疾患、あるいは障害にはさまざまな要因、病変があると考えられます。当科に顎関節症として受診した症例の紹介経路としては歯科医院が 4 割程度と最も多く、ついで 整形外科、脳神経外科、耳鼻咽喉科などの院内他科となっています。一方で紹介なしで直接患者本人が顎関節症を疑い受診するケースも 2 割ほど認めました。一次医療機関での顎関節症に対しての治療期間は 0 日から 6 か月と幅がみられています。今回の講演では顎関節症として紹介を受けた症例のなかで、紹介元での治療と当科で行った実際の診断・治療を供覧し、顎関節症と顎関節症様の症状を呈する疾患に関して検討したいと思っています。

<講演内容>

- I 医学部歯科口腔外科への顎関節症紹介患者について
- II 当科での顎関節治療について
- III 顎関節症以外の顎関節疾患について
- IV 難治性顎関節症の治療について

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節症以外の顎関節疾患と鑑別できる
- ・顎関節症類似の臨床症状を呈する疾患と鑑別できる
- ・外科的療法の適応症を判断できる

<略歴>

- 1989 年 明海大学歯学部卒業
1992 年 東京女子医科大学 医学部 歯科口腔外科学講座 助教
2004 年 東京女子医科大学 医学部 歯科口腔外科学講座 准講師
2005 年 ワシントン大学 免疫部門 客員研究員
2006 年 セント・ジュード小児研究病院 免疫部門 博士研究員
2007 年 東京女子医科大学 医学部 歯科口腔外科学講座 講師
2009 年 東京女子医科大学 医学部 歯科口腔外科学講座 准教授
2019 年 東京女子医科大学 八千代医療センター 歯科口腔外科 診療科長
2020 年 東京女子医科大学 医学部 歯科口腔外科学 顎口腔外科学分野教授・基幹分野長

- 日本口腔外科学会 (専門医、指導医)
日本顎関節学会 (専門医、指導医)
日本口腔インプラント学会 (専門医、指導医、代議員)
日本顎顔面インプラント学会 (指導医、代議員)
日本有病者歯科医療学会 (認定医、指導医、代議員)
日本口腔科学会 (認定医、指導医)
日本口腔ケア学会 (代議員)
日本がん治療認定医機構 (がん治療認定医 (歯科口腔外科))



濱田 良樹

(鶴見大学歯学部 口腔顎顔面外科学講座)

『変形性顎関節症に対する顎関節洗浄療法ならびに 低侵襲な顎関節開放手術について』

<要旨>

変形性顎関節症 (Osteoarthritis: OA/顎関節症 II+IV 型) の症例においても、多くは顎関節症の基本治療 (非外科的治療) に奏効します。しかし一部の症例では、筋症状は消退しても顎関節痛による顎運動障害が残存し、顎関節洗浄療法 (洗浄療法) の適用が検討されます。洗浄療法 (当科では顎関節有視下洗浄療法を適用) では、関節腔内の起炎性物質を washout することで高い奏効率が得られますが、抵抗性を示す症例もあります。そのような症例においては、CT にて下顎頭機能関節面の骨棘 (ときに関節隆起に生じることもある) が高頻度に検出されます。当科では、この骨棘こそが顎運動時の関節痛の主因と考え、機能関節面に生じた骨棘の除去に主眼を置いた低侵襲な顎関節開放手術を行っています。本講演では、当科での OA に対する外科療法の流れを紹介しながら、洗浄療法や顎関節開放手術の実際とともに、適用基準や治療成績について概説します。

<講演内容>

- I 変形性顎関節症の病態
- II 変形性顎関節症に対する治療の流れ
- III 顎関節洗浄療法について
- IV 顎関節開放手術について

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節症の病態を説明できる
- ・顎関節症の診断および病態診断ができる
- ・外科的療法の適応症を判断できる

<略歴>

1989 年 3 月 東北大学歯学部卒業
1989 年 6 月～ 友誼会病院歯科口腔外科勤務
1990 年 4 月～ 鶴見大学歯学部附属病院診療科助手 (口腔外科)
1991 年 4 月～ 博慈会記念総合病院歯科口腔外科勤務 (出向)
1992 年 4 月～ 鶴見大学歯学部助手 (口腔外科学第一講座)
2003 年 4 月～ 鶴見大学歯学部講師 (口腔外科学第一講座)
2008 年 11 月～ 鶴見大学歯学部教授 (口腔外科学第一講座)
2011 年 4 月～現在 鶴見大学歯学部教授 (※口腔顎顔面外科学講座) ※講座名変更

日本顎関節学会 (専門医、指導医、代議員)

日本口腔外科学会 (専門医、指導医)



儀武 啓幸

（東京医科歯科大学大学院医歯学総研究科
顎顔面外科学分野）

『滑膜軟骨腫症、咀嚼筋腱・腱膜過形成症、 筋突起過形成症の診断と治療』

<要旨>

顎関節症に対する初期治療が奏功しない場合に考慮すべきは、1) 診断の妥当性、2) 治療方法の選択の問題、であると思います。滑膜軟骨腫症、咀嚼筋腱・腱膜過形成症、筋突起過形成症は、顎関節症と同様の臨床症状を示すため顎関節症との鑑別診断が困難であり、1次医療機関で的確に診断されずに、顎関節症として治療されることもあるかもしれません。また、顎関節症の治療経過が思わしくないことがきっかけとなって高次医療機関における精査で発見されることも少なくありません。本講演では、顎関節における滑膜軟骨腫症、咀嚼筋腱・腱膜過形成症、筋突起過形成症の症状と診断のポイント、顎関節症の各病態との臨床症状の類似点と相違点について解説すると共に治療の実際について症例を交えて解説したいと思います。

<講演内容>

- I 滑膜軟骨腫症について
- II 咀嚼筋腱・腱膜過形成症について
- III 筋突起過形成症について
- IV 診断のポイントと治療

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節症の診断および病態診断ができる
- ・顎関節症以外の顎関節疾患と鑑別できる
- ・外科的療法の適応症を判断できる

<略歴>

- 1995年 鶴見大学歯学部卒業
1995年 東京医科歯科大学第1口腔外科（顎顔面外科学分野）入局
2000年 東京医科歯科大学大学院博士課程修了（博士（歯学））
2006年 東京医科歯科大学大学院 顎顔面外科学分野 助教
2021年 東京医科歯科大学大学院 顎顔面外科学分野 講師

日本口腔外科学会（専門医）

日本顎関節学会（専門医、指導医、代議員）

日本口腔科学会（認定医）

International member of American Society of Temporomandibular Joint Surgeons (ASTMJS)

日本顎関節外科研究会（JSTMJS）創立メンバー